



美濃
舊衣
八丈綺談



貳

特別
^13
3646
2



へ13
3649
2

美濃 舊衣八丈 綺談 卷之二

東都 曲亭馬琴編演



乾為天 不破の関

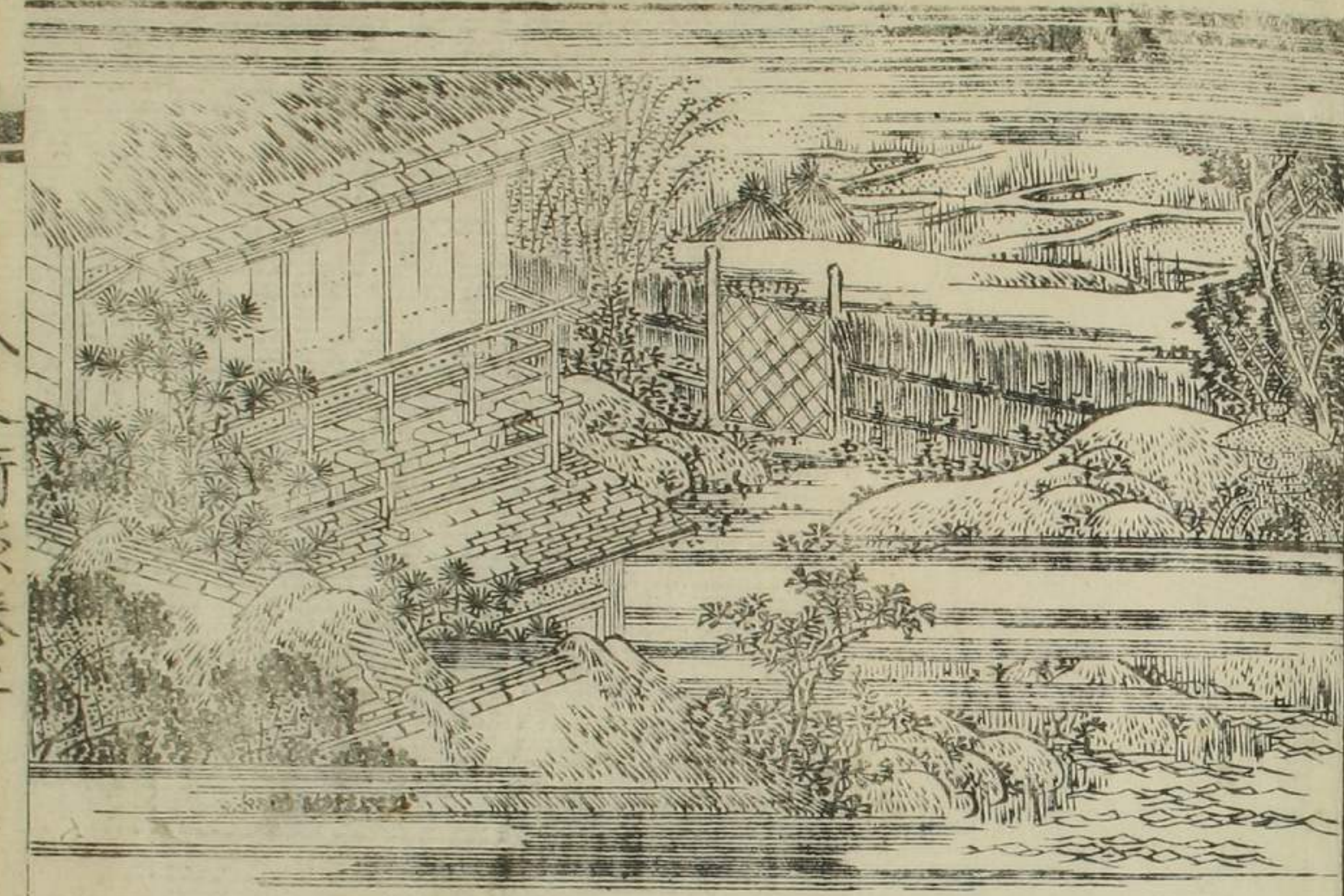
不破の関ハ美濃國不破の郡ニありし。古クは、不破の関ハ美濃國不破の郡ニありし。古クは、関の名は、不破の関ハ美濃國不破の郡ニありし。古クは、ひびく。この関
 天武天皇の白鳳二年より、天武天皇の白鳳二年より、東山道の打城なりとも。後、天武天皇の白鳳二年より、いづ
 荒らるるや、荒らるるや、歌よみとて、荒らるるや、照月の板庇を漏らし、荒らるるや、紙流り、荒らるるや、頽廢既小年なりて。
 今その蹟は定らるる後、今その蹟は定らるる後、関が系大関村関の藤川小川など、今その蹟は定らるる後、関紙くけて、今その蹟は定らるる後、
 小川の東より、小川の東より、関が系と遠くとも、小川の東より、又、小川の東より、若月一角が、小川の東より、奴隸諸平が、小川の東より、舊里、小川の東より、関、小川の東より、小川
 の西より、の西より、白木と唱へ、の西より、瘦村なり。却て、の西より、諸平のゆる比、の西より、合波林の、の西より、生、の西より、い、の西より、い、
 謀殺と撃殺し、謀殺と撃殺し、彼が守り、謀殺と撃殺し、賜る。金と、謀殺と撃殺し、輒く、謀殺と撃殺し、奪ひとり、謀殺と撃殺し、こゝに、謀殺と撃殺し、金と、謀殺と撃殺し、合、謀殺と撃殺し、と、謀殺と撃殺し、い、謀殺と撃殺し、い、

八丈綺談卷二



34-3432

生と一より日ごろ種々こと右の巻と
 披くとは。そふ見物もそれおと。母の
 うれしき見と。いほはく子むじいとなほ
 ぬあるととと久後とと憑うとと
 餓と死ると俵と。棄ととひ決て
 一々見と懐と抱と。彼此を徘徊
 ころと。村落の富豪早と。ととと寺
 くれのころとと棄の子とと門
 擇む。流石と親の情と。是首とせま
 彼首と。と味とらと。彼ととあぬ
 大岡村と数とわと。ととと棄とて



逢は岡の小門の。堀橋紙うらとと。り
 うと子ととと。揺揚つ。技はけとと
 野干玉の。夜の川波いと。まに浮世秋の
 ちん風と。折ととと。それまの。尾花が
 門ととと。當下諸平ととと。
 才化が。檐と瞻仰と。忽地ととと。やう。
 この。狐の。豫とゆ。が。故主の。同僚は。
 尾花氏の。新宅と。り。彼人の。殊と。守の
 ちんが。とと。愛と。り。と。と。と。と。と。
 退糧と。と。困居の人と。か。り。の。と。と。
 第一の。出。取。る。牧村の。壻。と。と。と。

今こそあは後さるるかくさるあふなり。そままぐまもさるるとして生涯
 かしてあはぶとく。衣食する缺く人まあらざ。男児ひとりありをさばけ
 女子めづらう人彼此と擇んより。女児がふは庇蔭を憑むこの人
 ままとのめり。とちひひ決一悪因縁母が乳をのりく護育おのがかあやと
 故まう。一角が仇とあつた。果敢みぬめと杉とく。背負あてり
 准坂の番と密するは釋あつて。音や疲勞らん。睡する男児を
 警とと懐より。やととむ。盛り。檐の柵は掛く。こころ子さるるの
 物垣夜まのぶはほごぬり泣く。親の泪の打水。濡くを袂のうらま
 暁の風八声の鶴と。共はまらう。男児と。あひ捨てをかりけり。かく
 諸平の四月が移。妻と喪ひ子と棄く。憂をやらせぬ。なすことごと
 女児がふは人同母。明白る告ぐるて。彼は物怪の幸。美良人といひ

のあはく。近江のく入遣。といひくらめて。人いさ。里は流俗まは
 こは紙外。又妹姉さるるのあり。諸平はその明年。因といは後妻と娶り
 より。三年といふ春の比。男児紙産せよけ。こころ紙諸太郎と名づけ。さ
 るるよその年の雷鳴。月よ山洪水。く出く。白木の一郵。大く屋は腰を
 洗。とれど。命危くさるる紙。諸平が伯所。山紙うま。殊は低
 知。とれど。脱ぶ紙。逆さるる。抱。夫婦。山は逃。りつ
 幸。さるる。恙。けと。あ。蹟。流。物。残。べう。あ
 稲。山。より。比。二十五金の本銭あり。此彼は用ひよけ。と。十二金
 餘の貯。祿あり。紙。こと。人。流。木。は。枝。と。失。澤。波。鮮。里。の
 穴。と。毀。る。進。退。と。究。輪。廻。報。の。と。か。あ。る。金。の。数
 と。あ。る。足。る。と。あ。る。ぬ。累。は。謀。殺。と。奪。ひ。と。る。金。の。数

しるは。里まゝの交衣の裾は牧駒とほろろ紙とむらむらしむそのを
ぢくふ駒とゆび。定むらむらと小桔梗が乳とりくこ紙守したる
あひの郊より肥むらむらいと愛とあつむらむらけとむらむら故もあつむらむらと
極まる隨うと扱くはむらむらと色あはれこそ棄らばけん。とあへ不佞いむらむらと
あつむらむらと医療と竭。或へ神仏へ立願。祈とむらむらと験とむらむらとて五年
あつむらむらと紙守とむらむらとて人あつむらむらとね容止まむらむらと愛敬ぶむらむらとむらむら
怜悧兄中と恩愛実の子とむらむらと。才作夫婦へ挿紙の花堂中珠と慈愛と
とむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと
婦とむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと
希の親のころとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと
縁紙とむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと

けり。かむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと
尾花が門孤過るむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと
四とむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと
むらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと
いと痛むらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと
う死集て諸太郎とむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと
棄て花や女兒が面靨雪の中る姫小松雪乃朝の瞿粟とむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと
女の童よりむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと
むらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらとむらむらと



山崎

諸太郎

諸平

才作

玉駒

才三郎

小きり

釋見
諸平
薪
賣

八女繪巻



この繡像の巻
おしきしき二守も
解分しては編末
至く當り水解

諸平

八丈前巻二

十一
山



因果塚
諸平才作

才作

八丈前巻二

尾山の軒の昔より近郷の茶毘所なる。牛向坊が空をくぐりてその名をまじりて
まじりてまじりてまじりぬ。

兒為澤 不破の園の下

尾花才也ハその夜より恙なく宿野へくぐりて。小桔梗才三郎ホリ因果
塚の崩とくる。事の一條我祝とせ。ゆりりくぐりて世に平けり。硯を獲て
とく袂包とぞ我被死。ちかくとく出せし妻もその子もいと怪死
物かたり又耳寂側て女と毎又驚嘆しく恙る死を致ひつ。小桔梗ハ
つくと硯我入てく良人又對ひ風流乃らるる。ませむかる古物ハ
愛めふと。とらしとくまうそふのく後ど。むくまう松次悪僧が今般
つとれまじいと惜る。袂を獲て人よとくせ又その硯をくぐりて
家の宝とくある。つとくり宗る死とゆらん墳の壤とくまじりて

空へ投入せぬふよままをとわらうん。こるも忌まわく切らさる。と正身ハ
林とび才也也く冷笑ひ膝死婦人のころろく。あつあつふの理りうとど
既ハ数百の年我歴て。自然と山崩とて空より出。硯ハ天の錫とらむ
昔とむとて死のめかり。陰鬼彼を失ひて。悪灵消散とてうんふ。
今又竹の祟あふ死。こらふん才が来る。と拒む舞のめとや。
日来又似けなく只むらうの硯を惜む良人のころろ我汲る移る小膝球とて
かまじり愛めふと。又まうさん怒とて。むく守あまこの沙汰あり。
墳我悲れくその硯と。とくかちと仰。紙が又我とてまじりて。その
沙汰止めと禱死とて。せつる。そのゆらじ。せつる硯とて。守進せ
あひる才三郎が後まじり。家の事我まをす。あらん。守人の報知とて

拾の郎成伸披る病じりけん終てあやむむとあふあふと打捨く
 ち死後といふの穢る徳を怪死と怪とあふ氣多なけむ妻もその子も
 感服し疑へ解るあふ。後よあひあふとむ彼虫のる教あふ
 族と還すと世よりかたれた実と蜻蛙あふ。牛勾坊は生と換て
 又そのひとりなりしと才化なふとあふ。後よ尾花夫婦
 お駒が存の閑死し。その款びはとほむ彼が二八小なりん
 三郎と妻見ん。そのあふ明地の子どもらよひあふとせよ
 ちよく小桔梗の日母ふか駒よあふ。又縫刺のる我教え糸竹の枝
 まてと海とあふ。去歳と暮る今年とあふ。お駒が容止ハふ
 まし。沈魚落馬。羞月閉花と唐人のいひえも。てとつとわりふ少女
 けりぬふ十あふ。三四の生ごらつまふ。送は情しく才三郎と。

青 蚊 畧 圖 說



青蚊形如蠅而長其子如蝦子着草葉上說形如蠅青色有光生於池澤多集蒲葉上故名蒲蠅以母血塗八十一錢以子血塗八十一錢留子用母留母用子皆自還誠仙術也說見淮南子萬畢術于室搜神記李珣異物志今据本草圖經以潤色之

つくとおぼや。母のしとて嫉憎とめふ八丈と情由あると致しとて初
 人よや告るとおひあふ故るべし。と主と志らざるよあふ福と三の手より
 養育せらる下。姨の浮名紙しつら立づ死さまふとて明地は棟のとも
 かろる福が。さよゆるとてその甲斐あり。今もや人とかりぬ下ふ美
 濃へ勤めく父の安否を伺ふ人い大なる不孝と只顧まわひし決めて
 一封の遺書よ。さよし紙とせめ。手口と逐電志するなり。さよとてそのさよ
 誠とていふとて。律とて親のなるとて皇天その孝を監と神明
 とて。紙債とてや。あつとて。仇人の家よ。刃と投り。とて不思議と。



美濃舊衣八丈綺談卷之二終

